

経済学と 会計学の 世界

経済学の形成と展開

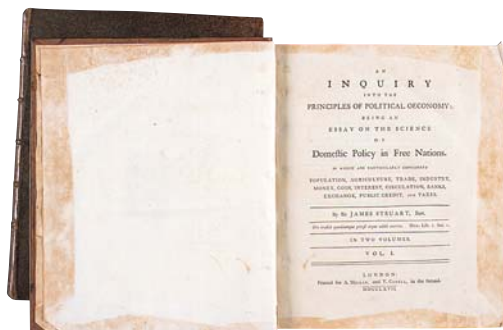
「経済学」の形成はそれぞれに個性的な「三名の18世紀スコットランド人」の開拓的努力によってなされたと考えられる。デイヴィッド・ヒューム（1711－76年）の『政治論集』（1752年）は小著ながらもその後に展開される多様な経済学的思考の豊かな「水源」を形成し、そこからジェイムズ・ステュアート（1713－80年）の『経済の原理』（1767年）と、この同郷人の著作への全面的対決を秘めたアダム・スミス（1723－90年）の『国富論』（1776年）という二つの大河が、豊穡なデルタを形成しつつ流れ出ることになる。

ブリテンで最初の「経済学」の（「道徳哲学」からの）「独立講義」が19世紀初頭のエディンバラ大学の教壇で開始されたのも、これらの伝統と彼らによる三角州を踏まえたものであった。その大学の卒業生がジェイムズ・ミル（1773－1836年）で、彼の受けた大学での教養課程の成果がその子のジョン・ステュアート・ミル（1806－73年）に受け継がれて子ミルの『経済学原理』（1848年）（『国富論』の19世紀版）を生み出すことになるが、父ミルがイングランドに移住したのちに果たした最大の（経済学史上の）功績が友人のデイヴィッド・リカードウ（1772－1823年）に『経済学および課税の原理』（1817年）を書かせたことであろう。父ミル自身の『経済学綱要』（1821年）はリカードウ『原理』を下敷きにしたものであった。そのリカードウの論敵となるトマス・ロバート・マルサス（1766－1834年）の『人口論』（1798年）と『経済学原理』（1820年）（とりわけ後者）の問題提起の一端はジェイムズ・ステュアートのなかに見られるものである。

関西学院大学図書館には、アダム・スミスを中心とする「スコットランド啓蒙思想」関連の著作が豊富に所蔵されており、以上の黎明期経済学の特質はこれらの原典に触れることによってその一端を垣間見ることができるであろう。

（篠原 久）

上：アダムスミスを記念して発行された
スコットランドの1ペニー銅貨
下：『帳合之法』



50

経済の原理

Steuart, Sir James, *An inquiry into the principles of political oeconomy: being an essay of the science of domestic policy in free nations...*, 2 vols. London, A. Millar and T. Cadell, 1767.

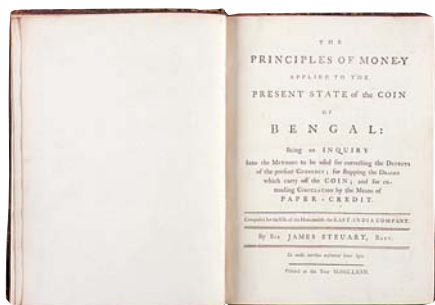
『経済の原理』（1767年）

ステュアート（1713–80年）は、スコットランドの法曹貴族の家に生まれたが、ステュアート旧王朝の復位をめざすジャコバイトの反乱（1745年）に荷担したため、その敗北にともなってヨーロッパ大陸諸国で18年の亡命生活を余儀なくされた。その間に経済学の勉強と諸国の政治・経済・文化状況の観察をおこない、体系的な経済学書の執筆を開始した。帰国後さらに信用と租税の理論を書きついで、経済学の初めての体系的書物として本書を出版した。それはスミスの『国富論』に先立つこと9年であった。タイトルのなかに“political oeconomy”の語が使われた英語の書物は、本書が初めてである。本学所蔵本には、‘Sir James Colquhoun of Luss Bart’の蔵書票が貼られている。カフーンはスコットランドの貴族で、所蔵者は第2代の準男爵ジェイムズであろう。

（竹本 洋）

『ベンガルの鋳貨の現状に 適用さる貨幣の原理』（1772年）

18年間の亡命生活を終えて1763年に祖国のスコットランドに帰ってきたジェイムズ・ステュアート（1713–80年）は、当初より、銀行・貨幣問題についての大家とみ



51

ベンガルの鋳貨の現状に適用さる貨幣の原理

Steuart, Sir James, *The principles of money applied to the present state of the coin of Bengal: being an inquiry into the methods to be used for correcting the defects of the present currency; for stopping the drains which carry off the coin; and for extending circulation by the means of paper-credit. Composed for the use of the honourable the East-India Company, 1772.*

なされていた。本書『ベンガルの鋳貨の現状に適用さる貨幣の原理』は、主著の『経済の原理』（1767年）を刊行したあと、東インド会社の要請に応じて執筆・出版したものであって、「現在の通貨の欠陥の矯正法」、「鋳貨の流出防止法」、「紙券信用による流通の拡大方法」について論じている。本書には‘R. W. Bosanquet, Rock, Northumberland’の蔵書票が貼られており、全ページにわたって間紙が綴じ込まれている。このR.W.Bosanquetは、リカードの『地金の高価格』（1810年）への反論を書いたイングランド銀行の理事チャールズ・ボウズンキトの息子であろうと考えられている。（竹本 洋）



52

商業試論

[Cantillon, Richard], *Essai sur la nature du commerce en général. Traduit de l'Anglais. A Londres, chez Fletcher Gyles, 1755.*

『商業試論』（1755年）

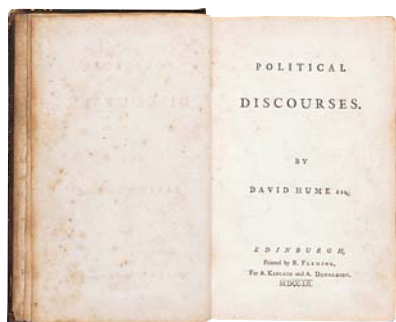
アイルランド生まれのカンティロン（[1680/90]?–1734年）はフランスで銀行業を営み、ジョン・ローの「ミシシッピ計画」に乗じて大儲けをした。その「計画」の崩壊を機敏にも察知して、その被害を免れたものの、ロンドンの邸宅に火を放たれて、炎につつまれて最期を遂げた。本書『商業試論』の草稿はすでに1730年代の中頃に英語で書かれていたようで、著者自身の手でフランス語に翻訳された。ミラボー侯（1715–89年）はこの仏訳草稿を長く手元において、自分の『人間の友』の一部に利用したが、草稿自体は何者かの手直しがなされた上で、1755年に刊行された。扉にある出版社名は架空のもので、出版地もロンドンではない。本書は背後にローのシステムの批判を潜めながら、価値・価格・貨幣・利子・外国貿易・為替を簡潔に、しかも体系的に分析したものとして、フランスのフィジオクラートやイギリスのJ. ステュアートらに影響を与えた。後にW. S. ジェヴォンズによって再評価され、近代の経済学の創始者と見なされた。

（竹本 洋）

『政治論集』（1752年）

ヒューム（1711–76年）の処女作『人間本性論』（1739–40年）は、著者をして「印刷機から死んで生まれた」と嘆かしめたが、本書『政治論集』は、出版当初から世に受け入れられ、大陸諸国でも各国語訳がなされて広く読者を得た。経済的テーマと政治的テーマの論説を含んでいるが、とくに経済的諸論説は、この時代にあって、経

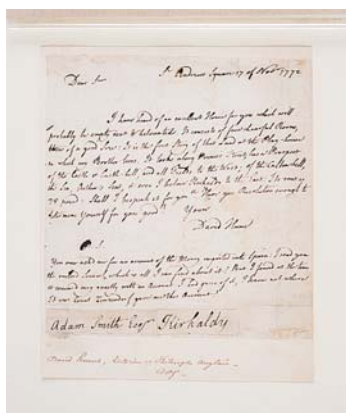
済的自由主義と実物的経済論を最も高い水準で示したものであり、同時代のアダム・スミスだけでなく、貨幣的経済論を展開したJ. スチュアートにも大きな影響を与えた。国際間の貨幣量の自動調節論は、「ヒューム命題」の名で、今日でもしばしば問題にされる。（竹本 洋）



53
政治論集
Hume, David, *Political discourses*. Edinburgh, A. Kincaid and A. Donaldson, 1752.

「デイヴィッド・ヒュームの アダム・スミス宛自筆書簡」(1772年11月17日)

『アダム・スミス書簡集』第2版(1987年)に収録されている往復書簡323通のうち、スミスとヒューム(1711-76年)の往復書簡は55通含まれ、そのうちの40通がヒュームからスミスに宛てられたものである。第2版では新たに20通の書簡が追加されているが、そのうちの1通がヒュームからスミスに宛てられた本書簡で、1769年以降エディンバラに定住していたヒュームが、故郷のカーコーディの母親のもとで『国富論』の執筆に専念している親友スミスを、どうかしてエディンバラに呼び寄せようとして、強引に空き家を斡旋しようとしたものである。スミスがエディンバラに定住したのは、ヒュームの死後(および『国富論』出版後)2年の1778年以降のことである。追伸中の「スペインへの貨幣の輸入」についての「説明」(同封されたこの「走り書き」は現存していない)は、『国富論』第1編第11章中の「銀の価値の変動に関する余論」等に係わるものと推察される。ツインツェンドルフ伯爵は、オーストリアの文官にして金融の専門家で、『書簡集』の編者のロスによれば、ヒュームはこの人物にウィーンかロンドンで会ったものと思われるということである。



54
デイヴィッド・ヒュームの
アダム・スミス宛自筆書簡
Hume, David, [Letter] 1772
Nov. 17, St. Andrews [to]
Adam Smith, Kirkcaldy,
1772.

拝啓

あなたのためのすばらしい住まいが、次の聖霊降臨節におそらく空き家になるという情報を聞きました。明るい5部屋から成り、3部屋はかなりの広さがあります。劇場に連なる共同住宅の二階で、小生の兄がその住宅に住んでいます。プリンスズ・ストリートに面しており、[エディンバラ]城とその丘陵地帯、西に広がる平野の全景、カールトンヒル、海、アーサーズ・シート[ホルリッド宮殿南の死火山]が眺められ、東の方にはきっと[あなたが現在お住まいの]カーコーディでさえ望むことができます。家賃は35ポンドです。あなたのために予約をしておきましょうか。ご自身できっぱりと決心しませんか。あなたのためになることです。

敬具

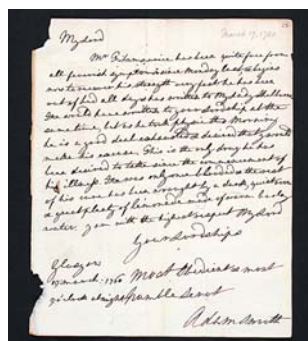
デイヴィッド・ヒューム

追伸

あなたはかつてスペインへの貨幣の輸入について小生に説明を求められました。同封したものが、それについての走り書きです。これ以上のことは小生には分かりませんが、この説明は小生が、どの箇所では覚えておりませんが、[著作のなかで]与えたものと正確に一致しています。それは小生がツインツェンドルフ伯爵から教えられたものなのです。

セント・アンドルーズ・スクウェア

(篠原 久)



55
アダム・スミスの
シェルバーン卿宛自筆書簡
Smith, Adam, [Letter] 1760
March 19, Glasgow [to 1st Earl
of Shelburne], 1760.

「アダム・スミスの シェルバーン卿宛自筆書簡」

(1760年3月19日)

宛名のシェルバーン卿(初代シェルバーン伯爵、ジョン・ペティ・フィッツモリス、1706-61年)はウィリアム・ペティ(1623-87年)の末裔に当たる人物で、その長男のフィッツモリス子爵(1737-1805年、のちの第二代シェルバーン伯爵、首相)は、自らが教育を受けたオックスフォード大学の沈滞ぶりに鑑みて弟のトマス・フィッツモリス(1742-93年)の教育をグラズゴウ大学のアダム・スミス(1723-90年)に委ねることになった。スミスは自分の教授宅にトマスを住み込ませてその教育に当たった。『アダム・スミス書簡集』にはトマスの行動・性格・勉学ぶりを父親のシェルバーンに伝える13通の書簡が収録されているが、本書簡は、トマスの病状からの回復を報告しているもので、この時期の書簡にみられる教え子に対する配慮は、のちに旅行付き添い家庭教師としてフランスから青年バクルー公爵(とその弟)

の病状をその母親と継父（チャールズ・タウンゼンド）に伝えている書簡のそれに匹敵するものである。

[シェルバーン] 閣下

[ご子息の] フィッツモリス氏は、[一昨日の] 月曜日より熱病の症候からすっかり解放され、目下のところ急速にご回復に向かっておられます。氏は一日中ベッドから出られて、シェルバーン夫人宛にお手紙を出されたところです。氏は閣下にもお手紙を差し上げるつもりでしたが、今朝服用の下剤により、たいへん衰弱され、そのことが叶いませんので、小生にその申し訳をしてほしい旨ご要望されました。ご発病以来、氏に服用するよう勧められたのはこの下剤が唯一のものです。放血が施されたのは一度だけで、残りの治療は、静かな薄暗い部屋で、十分な量の温かいレモネード入り大麦湯によってなされました。

敬具

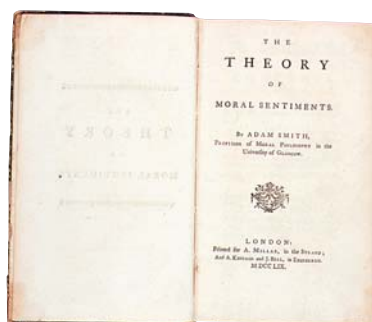
アダム・スミス

グラーズゴウ
1760年3月19日
夜中の9時

（篠原 久）

『道徳感情論』（1759年）

グラーズゴウの道徳哲学教授時代に発表したアダム・スミス（1723-90年）の処女作『道徳感情論』の初版。恩師ハチスンの道徳理論と異なり、「徳」の内容としては「慎慮」（Prudence）に多大の関心を示し、「道徳的是認」の基準としては、モラル・センスではなく、ヒュームから継承した「同感」（Sympathy）論を展開した。本書末尾の古代ギリシアより18世紀中葉に至る「倫理学説史」は、スミスにおける「収集・整理・分類・配列」の卓越した才能を十分に示している。（篠原 久）



56
道徳感情論
Smith, Adam, *The theory of moral sentiments*. London, A. Millar; Edinburgh, A. Kincaid and J. Bell, 1759.

アダム・スミスを記念して発行された スコットランドの1ペニー銅貨

（1797年）

200年前の1797年に、アダム・スミスを記念して発行されたスコットランドの1ペニー銅貨。直径は35mm。铸貨の表面のスミス像は1787年にタッシーによって作成されたメダリオンにならったもの。裏面はWEALTH OF NATIONSと題され、その前景の港には、農業や製造業の象徴としての「すき」（プラウ）、「紡ぎ車」等が配され、遠景には、出航していく二、三艘の帆船がみえる。（篠原 久）

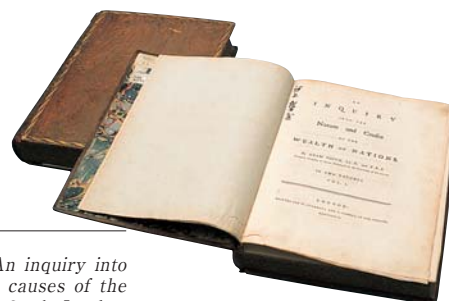


57
アダム・スミスを記念して発行されたスコットランドの1ペニー銅貨
The penny of Scotland commemorating Adam Smith, 1797.

『国富論』（1776年）

タイトルの出だし“An inquiry into”は、ステュアートの『経済の原理』のタイトルのそれと同じであり、スミスがこの先行の書物を意識していたことは、こうしたことにも表れているが、『経済の原理』が貨幣的経済学を樹立したのに対し、『国富論』は実物的経済学を打ち立て、古典派の設立者となっただけではなく、経済学の祖として今日まで、高い評価を受け続けている。

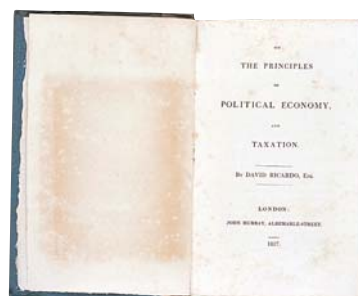
本学には『国富論』初版は2セット所蔵されている。展示のものは、河上肇（1879-1946年）の旧蔵書であるが、‘Lord Somers’の蔵書票が貼られているので、もともとの所蔵者（あるいは一時期の所蔵者）は名門ソマーズ家と思われる。第2巻末に、『国富論』の初版と第2版に対する『増補と訂正』（1784年刊）が付けられているが、後に合冊されたものである。（竹本 洋）



58
国富論
Smith, Adam, *An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations*, 2 vols. London, W. Strahan and T. Cadell, 1776.

『経済学および課税の原理』（1817年）

ユダヤ系の株式仲買人として成功したリカードウ（1772-1823年）は、『国富論』に触発されて経済学の研究を開始し、本書『経済学および課税の原理』によって、古典派の最大の理論家としての評価を勝ちえた。スミスの労働価値論を投下労働価値論の方向に徹底化させて、地主・資本家・労働者の3階級による、資本主義経済における資本蓄積と分配の構造を説明した。他方で、全般的過剰生産の可能性を否定して、同時代のマルサス

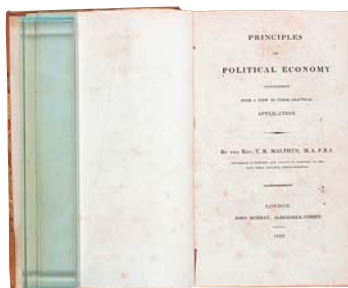


59
経済学および課税の原理
Ricardo, David, *On the principles of political economy, and taxation*. London, John Murray, 1817.

(1766–1834年) やシスモンディ (1773–1842年) と異なる立場をとった。後のマルクスのみならず、現代の経済学者にも様々な形で影響を与え続けている。(竹本 洋)

『経済学原理』 (1820年)

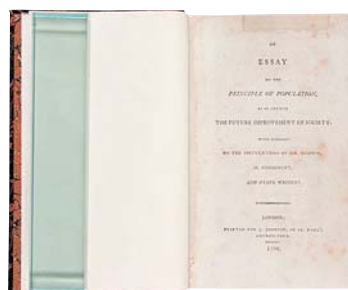
ケンブリッジ大学卒業後、牧師の職に就いていたマルサス (1766–1834年) は、『人口論』第2版 (1803年) 出版後の1805年に、新設の東インド・カレッジの近代史と経済学の教授に任命され、生涯その職にあった。彼のこの『経済学原理』は、リカードウの『経済学および課税の原理』 (1817年) への批判として書かれたものであって、マルクスからは「俗流経済学」として軽蔑されたが、J. M. ケインズは本書の有効需要論を評価して、リカードウの経済学よりも理論的に優れていると見なしている。経済学者の評価は、時代により、また評価する人の視点や理論的立場により多様であるだけでなく、ときに正反対でさえありえることを、リカードウとマルサスとの関係はよく示している。(竹本 洋)



60
経済学原理
Malthus, Thomas Robert.
Principles of political economy considered with a view to their practical application. London, John Murray, 1820.

『人口論』 (1798年)

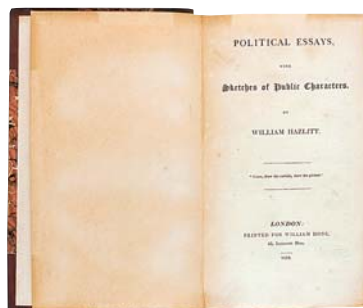
フランス革命に触発されたゴドウィンやコンドルセ (1743–94年) が人間の理性に信頼を寄せて、人間の完成可能性を信ずる楽観的見解を提出したのに対して、マルサス (1766–1834年) は、人口と食糧とのあいだの自然法的な関係を根拠に、貧困と罪惡の必然的発生という悲観的見解をもって応えた。過剰人口を回避する手段の一つとして、早婚の抑制という予防的制限策を説いたマルサスは『人口論』の改訂を繰り返し、生前に6版を出版したが、その内容は各版によってかなり異なる。(竹本 洋)



61
人口論
[Malthus, Thomas Robert].
An essay on the principle of population, as it affects the future improvement of society, with remarks on the speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other writers. London, J. Johnson, 1798.

『政治試論集』 (1819年)

評論家としては英文学史上第一級の地位を占めるウィリアム・ハズリット (1778–1830年) の『政治試論集』。

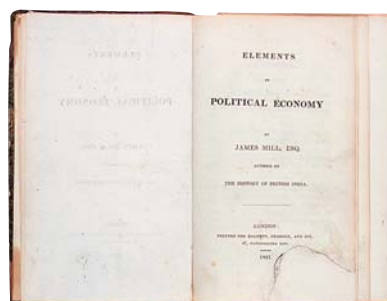


62
政治試論集
Hazlitt, William.
Political essays, with sketches of public characters. London, William Hone, 1819.

彼はロマン派の詩人たち (コールリッジ、ワーズワス、ラム) からの影響で、一時画家を志したが断念し、ジャーナリズムの世界に入り、『モーニング・クロニクル』紙、『エグザミナー』誌、『エディンバラ評論』誌等のために執筆した。本書にはとりわけマルサスの『人口論』に関する論評が数多く含まれている。(篠原 久)

『経済学綱要』 (1821年)

ジェイムズ・ミル (1773–1846年) は、ローダデイル (1759–1839年) とともに、スコットランド啓蒙解体期の代表的な知識人である。彼はリカードウに勤めて『経済学および課税の原理』を執筆させるとともに、みずからはリカードウの弟子として、その普及に努めようとした。本書はリカードウの説を初学者向きに執筆したものである。生産・分配・流通・消費の4分法は、ミルが初めて採用した。(竹本 洋)



63
経済学綱要
Mill, James.
Elements of political economy. London, Baldwin, Cradock, and Joy, 1821.

J. S. ミル『フランス滞在日記』

(1820年7月20日～9月15日)



67
J. S. ミルの肖像画
G. F. ワッソ画
P. A. ラジョン制作

「ミルの少年時代の最も重要な記録」であり、「彼の知識の真の特徴とその年頃の彼の知的能力をある程度実証できる」『フランス滞在日記』は、これまで二種類の資料が知られている。最初の資料は、1956年アンナ・ジン・ミルが購入し、現在では、スコットランドのセント・アンドリュース大学図書館が所蔵する資料であり、他の一つは、その下書きをもとにフランス滞在の状況を12回の書簡の形で父ミルに送付したもの

で、現在では、大英図書館が所蔵する資料である。しかし、書簡7の下書きは、セント・アンドリュース大学図書館所蔵資料には見当たらない。これまで研究者の間では、この下書きに該当する第三の資料の存在が推測されてきたが、今回展示するのが、待望の第三の資料である。

この第三の資料は、7月20日から9月15日までの日記を含んでおり、8月11日前半までが英語で、その後半から9月15日までがフランス語で書かれている。その特徴の一つは、上記二つの資料が含まれていない8月2日の後半から8月9日までの日記が含まれており、これまで不明であった空白の一週間の子ミルの行動が明らかになったことである。その特徴の二つは、8月26日から9月15日までの日記については、これまで二種類の資料間比較のみが可能であったが、今回展示した資料によって、三種類の資料間での比較が可能となったことである。これら比較により、ミル父子の親子関係をさらに詳細に知ることができるようになった。

この新資料は、1922年にロンドンのサザビーズで競売されたメアリー・テラー（子ミルの養女ヘレン・テラーの姪）の遺品で、その競売番号は727であった。それは、3部の資料に分けられており、第一部がジュールゴンヌによる講義のノートで、現在はピアポイント・モガン図書館が所蔵し、第二部がセント・アンドリュース大学図書館所蔵であり、第三部がここで展示した関西学院大学図書館所蔵資料である。（井上琢智）



64
フランス滞在日記
Mill, John Stuart,
[Autograph manuscript
journal kept during his
stay in France, July 20-
September 15, 1820],
1820.

『経済学原理』（1848年）

マルサスの『経済学原理』とよく似たタイトルをもつが、末尾の「社会哲学への応用」というくだりが、ミル（1806-73年）の本書の特徴をよく表している。理論的にはリカードウの、したがって古典派の継承者としての立場を基本的にはまもりながら、経済学が抽象理論として自足することなく、他の諸学問との連携のなかで、経済理論の有効領域を確認すべきことを説いている。1830



65
経済学原理
Mill, John Stuart,
Principles of political
economy, with some
of their applications
to social philosophy.
London, John W.
Parker, 1848.

年以降の社会・経済問題の深刻化と、社会主義の勃興とが、ミルを抽象的経済理論家の枠に押しとどめなかったのであろう。（竹本 洋）



66
自由之理 J. S. ミル著
中村敬太郎訳 駿河・木平謙一郎板
1872年 6冊

J. S. ミル『自由之理』（1872年）

訳者中村敬太郎（1832-91年、正直、号は敬字）は、昌平黌の御儒者で、1866年から68年にかけて幕府が派遣したイギリス留学生の取締役として渡英した。12名の留学生には、菊池大麓、林董、外山正一などがいた。この留学を世話したのが、駐日イギリス公使パークスであり、海軍付牧師のL.W.ロイドに引率を依頼した。彼の留学先は、ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジであった。留学生は、最初ユニバーシティ・カレッジ・スクールに入学し、その後ユニバーシティ・カレッジに進学し、英語、数学などの基本的な学問を学んだ。このカレッジには、化学者でミルの親しい知人で、長州や薩摩のイギリス留学生を世話したウィリアムソンがいた。

中村は独学で文学などを学んだ。帰国後、静岡学問所教授を経て、明治政府に招かれ大蔵省翻訳御用となり、啓蒙雑誌『明六雑誌』を刊行していた明六社社員として活躍し、関西学院に深いかかわりのあるカナダ・メソヂスト教会の監督になった平岩愼保を含む多くの逸材を輩出した私塾同人社を経営し、後に東京大学教授、元老院議員、貴族院議員などを歴任した。

帰国に際して友人から贈られたS. スマイルズのSelf-Help（1859年）の邦訳が『西国立志伝』（1871年）である。その邦訳・出版の意図は、旧幕臣に「自主・自由・職業の神聖・誠実・勤勉などの精神的・倫理的真髓」を植えつけることであった。翌年にJ. S. ミルのOn Liberty（1861年）の1870年版を邦訳したものが、ここで展示した『自由之理』（1872年）である。その邦訳・出版の意図は、小泉仰によれば「キリスト教の隣人愛の教義をそれとなく自序で」掲載することによって、キリスト教禁止令の廃止を間接的に要望し…信仰の自由を勝ち取るためであった」（『J. S. ミル』研究社出版）。事実、「敬天愛人説」（1868年）を説き、1874年カナダ・メソヂスト宣教師のG.カックランから受洗し、『（訓点）天道溯原』（1875年）を出版した。関西学院第二代院長吉岡美国によって「敬神愛人」が関西学院のスクール・モットーとなった時代もあった。（井上琢智）

複式簿記の生成とわが国への導入

複式簿記は、13世紀初頭のイタリアにおいて債権・債務の備忘録として発生した。発生当初の第一義的な役割は、^{いさかい} 諍が生じた時の文書証拠にあった。そこでは、損益勘定は設けられず、単に取引の証拠記録として機能していたに過ぎなかった。企業の総括的な損益を計算するシステムが完成するのは、14世紀前半になってからのことである。しかし、ヴェネツィアとフィレンツェでは、その計算システムを異にしていた。

ヴェネツィアで見られた家族中心の企業形態では、企業全体の総括的な期間損益を計算する必要性は、少なかった。家族間での利益分配は、他人を含んだ期間組合ほど深刻ではなかったからである。世界最初の簿記書ルカ・パチョーリの『スンマ』（1494年）は、このヴェネツィアの商人たちが一般に行っていた方法を要約したものである。いわゆる口別損益計算である。それに対して、フィレンツェでは、第三者を含んだ期間組合が中心であったため、利益分配の現実的な必要性から、商人達は、必ずしも定期的ではないが、企業の総括的な期間損益を計算する方法をとった。これが先駆的期間損益と呼ばれる損益計算システムである。今日のような損益計算システム、すなわち1年ごとの定期的な期間損益計算が完成するのは、16世紀の後半以降のことである。

わが国では、江戸時代に^{ちやうあいほう} 帳合法と呼ばれるわが国固有の簿記法が存在していた。なかでも出雲の富山家、江州の中井家、京都の三井家等の帳簿は、複式決算構造を備えた非常に優れた簿記法であった。しかし、明治新政府の政策により、わが国固有の簿記法は、急速に西洋式の複式簿記に取り替えられていった。その先駆をなしたのが、1873（明治6）年の福澤諭吉が翻訳した『帳合之法』とアレグザンダー・アラン・シャンドの口述書『銀行簿記精法』である。

（渡邊 泉）



68

算術・幾何・比および比例総論 第2版
Pacioli, Luca, *Summa de arithmetica geometria, proportioni, et proportionalita*.
[In Tusculano, Paganino de Paganini, 1523.]

世界最初の簿記書『スンマ』（第2版：1523年）

イタリア各地の大学で数学の教鞭をとり、生涯独身を通したフランシスコ派の修道僧ルカ・パチョーリ（Luca Pacioli：1445？－1517年）の手によって、世界で最初の、厳密には最初に印刷された簿記書『算術、幾何、比および比例総論』（*Summa de arithmetica, geometria, proportioni, et proportionalita*—略称スンマ）が出版された。1494年11月のことである。当時かなりの評判を得て、1523年には第2版本も出版された。今日、世界で初版が99冊、第2版で36冊が残存するといわれている。ここに展示する関西学院大学の所蔵本は、第2版本36冊のうちの1冊である。

わが国の史家の間では、平井泰太郎氏の秘蔵本が知られ（現在2冊のうち初版のみ神戸大学が所蔵）、その他にも、関西学院大学、大阪経済大学を始めいくつかの大学図書館に所蔵されている。また、英語、ドイツ語、現代イタリア語、ロシア語等世界各国語にも翻訳され、邦訳版も平井泰太郎、片岡義雄両教授等幾人かの研究者によりすでに上梓されている。『スンマ』は、その書名の示すとおり、数学書である。全体は2部に分かれ、第1部（224葉）は算術および代数を取り扱い、第2部（76葉）では主に幾何論が論述されている。簿記は、第1部第9編論説第11「計算および記録詳論」（197葉裏－210葉表）で記述されている。全体は、36章から成り、財産目録で始まり、元帳記入規則の説明で終わっている。

『スンマ』は、当時のベニスの商人たちによって一般に行われていた簿記法を要約したものである。記帳システムは、日記帳、仕訳帳、元帳による単一3帳簿制がとられ、損益計算は、今日の期間損益計算ではなくいわゆる口別損益計算によって行われた。勘定の締切方法は、決算残高勘定を用いない簡便法（いわゆる英米式決算法）によって説明されているが、体系的な取引例示はみられない。

（渡邊 泉）

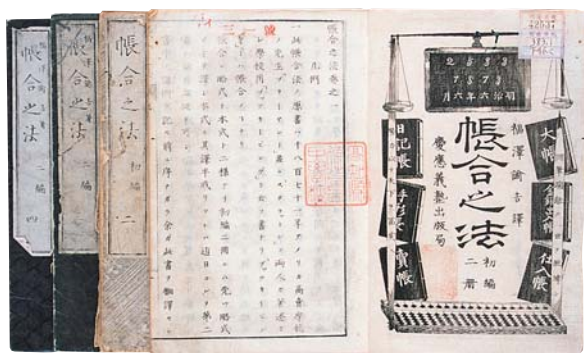
福澤諭吉『帳合之法』(1873-74年)

福澤諭吉(1835-1901年)によって著された『帳合之法』は、幕末から明治にかけて、わが国産業の近代化の過程に重要な役割を果たした。本書は、当時アメリカ商業学校の教師であったブライアント(Henry Beadman Bryant: 1824-92年)とストラットン(Henry Dwight Stratton: 1824-67年)による『ブライアント、ストラットン一般学校簿記』(Bryant and Stratton's common school book-keeping, New York)の翻訳本として公刊された。本書は、1861年に出版され、1864年に再版が、その後1866年から3年間にわたり相次いで重版された。翻訳の底本になったのは、192頁からなる1871年版である。

『帳合之法』は、全4冊木版刷りの和紙による和とじ本で、原書が第1部単式、第2部複式から構成されているのに対応して、初編と二編に分けられている。単式簿記を取り扱った初編「一」と「二」の2冊は、1873(明治6)年6月に、複式簿記を論じた二編「三」と「四」の2冊は、1874(明治7)年6月に出版された。福澤諭吉は、単式簿記を略式(簿記)、複式簿記を本式(簿記)と呼んでいる。

本書の最大の意義は、明治初期におけるわが国複式簿記の普及に多大の貢献をなした所にある。取引先の相手名を和名に変えて表示し、金額や数量も横書きローマ数字ではなく、商人たちが一般に用いていた和式帳合と同様の縦書き漢数字で表示している。また、取扱商品の和訳に当たっても、庶民の間では当時まだ一般的ではなかった「林檎」をあえて「蜜柑」と訳出するなど、一般の商人たちにも分かりやすく、かつ複式簿記法を広く普及させるためのさまざまな工夫を施している。関西学院大学名誉教授であった小島男佐夫は、「このような福澤諭吉翁の、実学をすすめる啓蒙精神は、伊太利のルネサンス期、パチョーリの『ズムマ』の裡に燃える精神と全く軌を一にするものであろう」と言っている。

(渡邊 泉)



69
帳合之法 福澤諭吉著
慶應義塾出版局 1873-1874年 4冊



70
銀行簿記精法 アラン・シャンド述
大蔵省 1873年 5冊

アラン・シャンド『銀行簿記精法』(1873年)

わが国におけるイタリア式簿記法の導入と会計制度近代化の出発点に、福澤諭吉の『帳合之法』とともに、アレグザンダー・アラン・シャンド(Alexander Allan Shand: 1844-1930年)の『銀行簿記精法』があげられる。前者は、後者に先立つこと2ヶ月前に公刊されたが、複式簿記を取り扱った「二編」が1874(明治7)年6月の出版であるため、わが国最初の複式簿記書は、1872年に来日したスコットランド生まれのアラン・シャンドの手によって上梓されたことになる。本書は、すでに1873(明治6)年8月には脱稿され、同年12月ないしは翌年の1月に全5巻として刊行されている。木版刷りの和紙による和とじ本である(うち1冊は、洋とじ)。

時の大蔵大輔 井上馨、紙幣頭 芳川顕正、大蔵大丞 渋沢栄一など明治新政府の首脳は、税制の改革、貨幣制度の改革、企業の近代化等のために明治6年8月1日株式会社第一国立銀行を創設した。とりわけ、通貨制度の改革のために、紙幣寮にシャンドを、造幣寮にはポルトガル人ブラガ(Vicente E. Braga: 1840-1911年)を招聘し、日本の金融経済の近代化に着手した。シャンドの記帳システムは、第一国立銀行の営業開始と同時に用いられ、その後全国各地に設立された多くの国立銀行で採用されていった。

『銀行簿記精法』は、全5巻から成り、第1巻は、初学者のために銀行の取引例を用いて仕訳の方法と帳簿の種類を分かり易く説明したものである。第2巻から第5巻までは、41種類にもおよぶ日記帳、総勘定元帳、補助簿についての詳細な説明がなされている。

『帳合之法』が明治の学校教育における簿記の普及に多大の尽力をなしたのに対し、『銀行簿記精法』は、単に銀行だけにとどまらず、保険業や信託業を始め広く一般の企業を含む実務界に少なからざる影響を与え、日本の近代化に大きく貢献した。

(渡邊 泉)